「いゝの？　そんなに飲んで？」
「大丈夫だ。」
お花は半分ばかりカツプについだ。
「おい。なんだつてこんなケチ臭えつぎようをするんだ？　一杯つげといつたら一杯つげ。」
「矢島さん。ほんたうに飲むの？」
「飲むからつげつていふんだ。さあ！」
うながされて、しかたなくお花はついだ。
庄太はすぐ呷つた。
「矢島さんは、お酒は強いはうだつてことは知つてゐるが、こんなに飲むとこを見たのは、はじめてよ。」
「威勢がいゝだらう。まだ〳〵飲むぞ。」
「……矢島さん。もつとくはしく、その女のことを話してお聞かせなさいよ。」
「氣にかゝるか。」
「えゝ、氣にかゝるわ」
「だが、もう、死んじまつたんだから、事はおしまひだよ。」と、庄太はいよ〳〵淋しく笑つて、「……

もうこれからは、その女のことは、忘れるばかりなんだ。」
「あら、薄情ね。忘れてしまふなんて。」
「薄情かね　……」
「えゝ、薄情よ。そりやあ、薄情よ！」
「よう〳〵、お話がもてますね！」
と、客はまたこつちへ聲をかけた。
「女が死んだから、こんどは花ちやんの番だつて仰有るんだよ！」
他の一人がこれに和した。
喧嘩の早い庄太の氣象を知つてゐるお花は、眼で、なにもいふなと客を制した。
庄太は知らぬ顔をしてゐた。たゞ、默つてカツプを呷りつけた。フーツと、天井に醉を吹いた。
「矢島さん。その話をもつとしてよ。あたし、悲しい話を聞くのが大好き。」
「悲しい話を聞くのが好きだつて？　こいつ、人の憂ひを喜ぶ奴だ。」
「そんなわけぢやないわ。そんな意味にとつちや困るわ。たゞ、あたし、悲しい話を聞いて泣いて見たいのだわ。あたしこの頃、泣いて〳〵、涙の出なくなるまで泣いて見たいと思つてゐるのよ。」
お花はいつしか眞面目になつた。

「へつ、お花ちゃんにも、泣ける涙があるんかね？」
また客がまぜつかへした。
「馬鹿にしないことよ！　あたしだつて涙は持つてゐるわ。あたしだつて、こんな女給こそしてゐるが人間らしい涙は充分持つてゐるわ！……ふん、馬鹿にしてら！」
お花は怒つた。
庄太は默つて、グツと客を睨めつけた。
客は、庄太の或る氣勢に呑まれたか、それつきりなにもいはなくなつた。
「あゝ、醉つた……」
庄太はグタリと圓卓にもたれた。
お花は角鰻をもつて、帳場のはうへ行つた。
「醉つた。醉つた。いゝ心持だ！」
庄太は、つぶやくでもなくつぶやいた。
——やがて、ふつと彼は顏をあげた。
强く決意するやうな色が、彼の眼に一瞬きらめいた。
「さうだ！　やつつけろ！」

壁際の客は、彼の聲にギヨツとした。
「……今に……今に、見ろ！」
庄太の吐く息は凄じかつた。
客は、自分たちの頭にふりかゝつて來るのではないかと、意氣地のない顏を見あはせた。
「おい、勘定だ！」
庄太は、そつちを振り向きもしないで、椅子からフラ〳〵と立ちあがつた。

——その日は、どうしたものか、庄太の姿が工場に見えなかつた。
雨が降つても風が吹いても、一日として休んだことのない、また一分として遲刻したこともない庄太が、どうして今日は朝から姿を見せないのか、靖也は不審に思へてならなかつた。——昨日あれほど元氣らしく働いてゐた庄太である。病民といふことはあるまい。しかし、考へて見れば、お加代が死んでからの彼は、外面に元氣をよそほつてはゐるものゝ、心の打擊は强いにちがひなかつた。あの事件の夜から、彼はズツと睡眠不足らしく、眼は血走り、唇はいつも痙攣的に震へてゐた。無理に精神を引き立たし、無理に肉體を動かしてゐる氣はひが、靖也に痛ましく感じられた。彼が工場に働

いてゐる時は、まだしも仕事にまぎれて氣も晴れてゐようが、家に歸つて寢に就いてからは、彼のはげしい自責や反省の心から、いくたびか床のなかで、輾轉反側してゐたことにちがひない。惱ましい惡夢に襲はれては覺め、覺めては襲はれてゐたことにちがひない。翻然と悔悟して、自分とおなじ正しい「一つの道」をまつしぐらに歩んでくれる彼――それだけに、彼の苦しみ、彼の煩ひは深かつたにちがひない。それを飽くまで胸にをさめて、人一倍に工場で働きぬいた彼である。疲勞につゞく困憊が、彼の身體を弱らしたのではあるまいか……？

靖也は、給仕を庄太の家にやつて見た。

「矢島さんは、昨夜めづらしく醉つて家に歸つて來たのださうです。しかし、今朝はいつものとほり起きて、これから工場へゆくのだといつて、出たのださうです。あなたのお言葉でやつて來たのだといつたら、そんならどこへ行つたのでせうと、お内儀さんも不思議な顏をしてゐました。心配してゐました。」

と、給仕は報告した。

「さうか、御苦勞だつた。」

と、靖也はいつたが、彼にも庄太が、家を出てゐながら、なぜ工場へ來ないのか、それが不思議でもあり、また、どうやら心配でもあつた。

「變だな……」彼はひとり首をひねつた。「どこへ行つたのだらう？」

正午の警笛が鳴つた。

それでも庄太の姿は現れなかつた。

「この頃、あの男はひどく感傷的になつてゐる。……或は、お加代の墓へ詣つたのかも知れない。」

と、彼は考へた。

お加代は、谷中の、わが家の墓にあつく葬られてゐる。彼は、今日一日を休んで東京まで出かけたのかも知れない。そしてついでに西片町のわが家に立ち寄つて、父の良助に會つてゐるのかも知れない。――さうだ。さうにちがひない。酒癖はかなり惡いはうではあるが、彼が昨夜醉て歸つたにしたところで、今日またその久しぶりの味にひかされて、酒場などにシケこんでゐるやうなことは、萬々ない筈である。彼が醉つて歸つたといふのは、恐らくは自分の苦惱をまぎらさうための手段で、以前の庄太にかへつて、酒の味が戀しくなつた譯では、決してなからう。

「さうだ。東京へ行つたにちがひない。それよりほかに、今のあの男には考へられないことだ。しかし……」と、ちよつと靖也は思ひかへした。「しかし、それにしたら、僕に電話かなんかで斷つてゆきさうなものだ。なにかひと言、どこへゆくから今日は休ませて頂くと、ことづけでもしさうなものだ。ひとりで勝手に休むといふことも、今のあの男には考へられないことなのだ。すると……？」

靖也には、いよ〳〵不可解になつて來た。
なにか、凶悪な豫想感といふやうなものが、彼の頭腦にむらがつた。
或る、妙に落つけぬ不安に驅られながら、靖也は船臺に働く人々のなかに、立ちまじつてゐた。

——庄太は、靖也の考へたとほり、東京に出て來たにはちがひなかつた。しかし、彼はお加代の墓に詣つたのでもなく、また父の良助を訪ひ尋ねたのでもなかつた。
どこで飲んだか、酒氣を帶びた庄太の姿は、青山高樹町の、高莊な、隈部邸の玄關に現れたのであつた。
綠の深い植込みをぬけて、彼は石段をあがるなり、玄關の呼鈴を鳴らした。
ドアを開けて、書生が顏を出した。
油にまみれた勞働服の庄太を見ると、彼は迂散臭さうに、
「なんだ、お前は？」
「わたしは、矢島庄太といふ者です。」
庄太はそれでも帽子をとつた。

「矢島庄太？」と、書生は横柄らしく、「なんだ、なにかお使ひにでも來たのかね？」
「えゝ、使ひぢやありません。わたしの用事でやつて來たのです。ちよつと、奥様にお目にかゝりたいと思つて、やつて來たのです。」
「なに、お前が奥様におひしたい？」
「え、さうです。どうか、よろしくおとりつぎください。」
「お前はなに者だ？」
「御覽のとほりです。勞働者です。」
「はゝあ、隈部鐵工所の者かね？」
「いゝえ、そんな……」ケチなところ——と庄太はいひたかつたのを輕く笑つて、「そんなところに働いてゐる者じやございません。」
「なにか、紹介狀でも持つてゐるのか？」
「紹介狀なんてものは持ちません。」
「紹介狀がなくちや駄目だ。御主人も奥様も、紹介狀のない人間には一切お會ひなさらないのだ。」
「ほんの五分でも十分でもいゝから、お目にかゝりたいのですが……」
「駄目だ。」と、書生は一喝するやうに、「いつたい、お前みたいな風體の者が、なんの用があつて奥様

に御面會したいといふのだ？」
「會つてお話しすればわかります。……こんな風體はしてゐますが、まさか、お金の無心にあがつたのではありませんから、御安心なすつて、おとりつぎをお願ひします。」
「お前は、奥様に、一度でもどこかでお會ひしたことがあるのかね？」
「いゝえ、一度も……實は、奥様のお顔も存じあげないのです。」
「まるつきり奥様をお知り申しもしないで、紹介狀もなしにフラリと來て、奥様にお目にかゝりたいなんて……そんなことがとりつげると思ふか。馬鹿なことをいはんで歸るがいゝ。」
「馬鹿なこと？」と、庄太はムツとしたが、すぐまた笑つて、「まあ、お目にかゝりさへすれば、わかることなんです。あなたは、わたしのお願ひすることを、ちよつと奥様にとりついでくだされば、いゝのです。」
「そんなことができるか？　會へばわかるといふだけで、見も知らぬそんな風體の人間を、輕々しく奥様にとりつぐことができるか？　……歸れ、歸れ。」
「へい、とりつぎすることは、できないと仰有るんですか？」
「わかりきつた話だ。」
「ふん、ぢやあしかたがない。おとりつぎくださらんのなら、わたしがこれから、ぢき〳〵にお目に

かゝりに參りませう。」
庄太は、グツと書生を突いて、ドアの中へ押し入らうとした。
「おや？　貴様、暴力で入らうとするな？」
と、書生は氣色ばんだ。
「暴力？　わたしは、暴力なんか使ひませんよ。たゞ奥様にお目にかゝつて、ちよつと或ることを、お話し申しあげたいと思つてゐるばかりですよ。」
「入れることはならん。」
「……さうですか、入れることはならんと仰有るのですか。それぢやあしかたがない、奥様がお會ひくださるまで、わたしはこゝでお待ち申すといたしませう。」
庄太は石段の上に、大きくあぐらをかいた。
「どうしたのだ？」
その時、執事らしい、袴をはいた老人が、書生のうしろから聲をかけた。
「こいつが、奥様にお會ひしたいなんて、妙な、言ひがゝりのやうなことをいつてゐるのです。」
書生は簡單に庄太の言葉を老人に告げた。
「さうか。」と、老人は心得顔にうなづいて、「わしは當家の奥の御用一切を承はつてゐる者だが、お

前さんは、自分の用向きも云はないで、奥様にお目にかゝりたいから、とりつげなんていふのは、すこし亂暴ぢやないかね？」

「へい。」と、庄太はヂロリと老人を見あげて、「これは奥様の秘密にかゝはる話なんだから、お目にかからないぢや申しあげられれん、といつてゐるのですよ。なんとかおとりつぎ願ひたいんで。」

「秘密？　――お前は妙な事をいふ男だな。奥様は秘密といふやうなものをお持ちなさるお方ぢやない。公明正大に世間に對して立派な態度をもつてゐられるお方だ。不都合な言葉を使つちやならん。」

「わたしは、奥様に秘密といふ言葉を使ふことを、べつに不都合とは思つてゐませんがね。いや、むしろ當然のことゝ思つてゐるのですがね。」

「まあ、議論は無用だ。奥様はお前のやうな者に輕るゝしくお會ひになるお方ぢやない。歸つてくれ。」

「こつちも用事があつて、わざ〳〵來たのだからね。會ふまでは歸りませんよ。」

庄太はうそぶいた。

「歸らない？　……歸らなきや追ひ出してやる！」

書生はドアからそとに飛び出した。

「はゝゝ、暴力はおよしなさい。」

庄太は平然とやりかへした。

「それぢやあ、おとなしく歸れ。」

「歸りませんよ。」

「歸らない？　――どうしても歸らないといふのか！」

書生は庄太の右手を摑んだ。

「なにをするんです。」

「歸れといふのに歸らないからだ。理由もなしに奥様に面會を強要するとは怪しからん。」

「理由があるからやつて來たのだ！」庄太は左の拳をかためて、グンと逆に書生の手をひつぱづしながら怒鳴つた。「やい、なにを洒落つ臭え眞似をしやがるんだ。手前つちのやうな青ん造に、こゝを一寸でも動かされるおれと思ふか。下手に腕立てしやがると、とんだ怪我をするぜ。よしねえよ！」

「なにつ、生意氣な！」

書生はうちかゝらうとした。が、忽ち庄太に石段の下に突き倒されてしまつた。

「やい！　隈部の嬶あをこゝに出せ！　用があるんだ。この矢島庄太が用があつて會ひに來たのだ！」

庄太は老人につめ寄つた。老人はびつくりして飛びのいた。

書生はもう、庄太と爭ふ勇氣を失つてゐた。

「やい、隈部の嬶あをこゝに出せ！」
「……警官にひき渡すぞ！」
と、それでも老人は叱りつけた。
「警官なんかに恐れるおれと思ふか！　さあ、隈部の嬶あをこゝに出せ！」
廊下のドアが、ギツと開いた。
どこかへ出かけようとしたところか、輝くばかり華美に、妖艶に粧つた龍子の姿が、緋牡丹のゆらぎ出るやうに、靜かに現はれたのであつた。
「なんだね、騷々しい。」
彼女は胸を張るやうに立つた。
「奥様、こゝへおいでなさることは御無用に願ひます。なにか、亂暴者が、奥様に御面會を強要してゐるのでございます。」
老人は、庄太からかばふやうに、龍子の前に身をひいていつた。
「お前さんが、隈部の御夫人ですかね？」
庄太はすぐ玄關に躍りあがつた。
「えゝ、わたしが隈部龍子です。――隈部の嬶あですよ。ほゝゝ。」

「さうですか。」と庄太は睨みつけるやうに龍子を見た。「わたしは、お前さんにお話したいことがあつてやつて來たのです。」
「さう。」と、龍子は冷然と微笑して「お前さんは、どうした人なんだねえ？」
「わたしは、日東造船會社の一職工です。君塚靖也さんの下で働いてゐる者です。そして、君塚の旦那の家に使はれてゐる良助の子であり、お加代の兄にあたる者です。」
龍子の眼は、一瞬、險しく光つた。が、すぐ輕く笑み消して、
「さう。……靖也さんに使はれてゐる人なの？　……お加代さん……あゝ、おぼえてゐます。下女には惜しい、縹緻のいゝ可愛い娘だつたのね。一二度、君塚さんの家で見かけたことがある。」
「そのお加代は死にました。」
「あゝ、それは一週間ほど前の新聞に、ちよつと出てゐたやうだつた。」龍子は問題にしないやうな顏でいつたが、「しかし、飛んだ災難で、お氣の毒だつたねえ。」
「……」
庄太はキツと強く彼女を見た。
「まあ、そんな話はどうでもいゝ。お前さんはなんの用があつてわたしに會ひたいといつてゐるのだねえ。わたしはこれから、ホテルの晩餐會にゆかなきやならないのだが、わたしにいひたいといふ話

は、なんなのだねえ？」
「あなたは、小宮徹郎つて男を御存じでせう。」
「えゝ、知つてゐるわ。あの人間は、隈部の鐵工所に技師だつた男だが……なんでも新聞には、あの男とお加代さんとが死んでゐたと報導してあつた。どうした譯なのか知らないが、警察からもそんなことで一二度刑事なんかがやつて來て、主人と會つたやうだよ。主人もまつたく迷惑して、あの男の私的な行動には、まるで關係しないことだからといつてゐましたよ。どんな原因であんな事件が起つたのか、こつちはまるで知らないことなのだから、主人は卽刻、あの男の名を社員名簿から除けてしまつたのです。もつとも、死んだ者を名簿から削除することはあたりまへのことなのだが、とにかくこつちの社名が出ては迷惑千萬だから、鐵工所としては、解雇の形式をとつたのです。」
龍子は飽くまで雄辯だつた。
「……さうですか……いや、鐵工所としては、或はあの事件に關係がなかつたのかも知れません。しかし、あの男は、君塚の旦那の仕事に、或る目的のために恐ろしい妨害を加へようとしたのです。このことは御存じでせうな？」
「そんなことも新聞に書いてあつた。日東造船とわたしの鐵工所とは、近頃、すつかり意志の疏通を缺いてゐるので、小宮が個人で——そこにどんな目的があつたのか知れないが——あんなことをして

くれたことは、主人も甚だ遺憾だといつてゐました。世間といふものは、とかく、事實の眞相もたしかめないで、想像だけで惡い噂をたてたがるものだから困るといつてゐました。まあ、そんなわけで小宮も解雇の形式にしたのでせう。」
「なるほど、隈部鐵工所としては、或は關係のないことかも知れない……」
「或はでなはない。全然——だ。」
と、執事の老人は叱るやうにいつた。
庄太は、そんな言葉は耳にも入れぬといふ風で、一歩龍子の前に進みながら、
「……或は關係のないことかも知れない。」と、またわざと繰りかへして「しかし、小宮とあなたとの關係はどうです？」
「小宮とわたしとの關係？」
「さうです。小宮とあなたとの關係です。——それも全然ないとは仰有れますまいな？」
「お前は……お前さんは、なにをいふのです。小宮とわたしになんの關係があるといふのです。」
龍子はサツと顏色を變へた。
「わたしは、その話でお目にかゝりにあがつたのですよ。」
庄太は、眼は强く、聲は輕く笑つた。

「小宮とわたしに關係がある？　――失敬なことをいふ人間だ！　なんていふ失敬な……」
龍子は弱身を見せまいとするやうに、われからも一歩進み出た。
庄太は平氣であざ笑つた。
「奥さん、威張つたつてもう駄目だ。わたしはちやんとみんな知つてゐるのだ。……おい、お前さんにはまだ一度もお目にかゝつたことはないが、小宮とお前さんとの關係は、小宮自身の口からすつかり聞いて知つてゐるのだ。わたしはね、小宮の誘惑と教唆をうけて、一時、小宮の手下になつて、あのたくみに加擔した人間なんだ。それでも嘘だつていふなら、こゝに小宮からわたしにあてた手紙を二通も三通ももつてゐるのだ。……おい、それでも關係がないとはいはれめい。いや、おれがそんなこたあいはさねえ！」
「小宮がどんな手紙を書いたか知らない。あんな悪智慧のある奴だもの、どんなことを書いたか……
……」
龍子は表情を讀まれまいとするやうに、うそぶいた。
「なんといつて逃がれようとしたつて駄目だ。小宮のあの仕事はみんなお前の悪念から起つたことなのだ。おれはそれをみんな知つてゐる。すつかり見通してゐるんだぞ！」庄太は龍子に迫つた。
「妹のお加代は……お加代はそのために斃れてしまつた。お前は恐ろしい女だ。憎い女だ！　……

さあ、なんといつてお前の罪を謝するか？　どんな方法で、お前はその悪業を世間に謝罪するか！
おれはお前の謝罪を勸告に來たのだ！」
「なにをいふ。わたしはなんの關係もないのだよ。わたしはなんにも知らない。知らない者が、なんのために謝罪しなければならないのだね！」
「まだそんなことを繰りかへすのか？　なぜすべてを白狀しないのか！」
「白狀？　失禮な！　白狀とは罪のある人間にいふ言葉だよ！」
「お前は立派な罪人だ！　悪人だ！」
「なにか……それはきつとお前の誤解だよ。」と、執事は庄太の氣勢に脅えながらも口を出した。「きつと誤解だ。でなけりや、お前は誰かにいゝ加減なことをいはれて、煽動されたのだ。……ま、ま、話はあとで私がつける。今日はとにかく歸つてくれ。」
「歸らねえ。おれは誰からも煽動されちやゐねえ。おれはおれの心ひとつでやつて來たのだ。――この女が自分の非を知り、罪を世間に謝すると誓ふまでは歸られねえ。おい、隈部の奥さん、お前は恥ぢを知らないのか？　お前は自分に悔いるといふ心を持たねえのか？」
「わたしには恥づべき事も、悔いなければならないこともない。」
「な、なにつ！」

「わたしは正しい女なのだよ。」
「うぬ、よくもその口でそんなことがいへるな！　悪婆！」
「ほゝゝ、悪婆？　……ほゝゝゝゝゝ！」
「さあ、罪を白状しろ！　そして、潔く世間に謝罪しろ！」
「……もうこんな男に構つてゐられない。晩餐會の時間が來た。岡本！　自動車を早くさういつておくれ。」
龍子は石段の下に、ボンヤリ立つてゐる書生に命じた。
「うぬ……どうしても……どうしても謝罪しないといふのか！」
「岡本！　自動車を早く！」
「……この悪婆！」
猛獸の唸るやうに叫んだかと思ふと、庄太はパツと龍子に飛びかゝつた。
あれ！　――と避ける間もなく、龍子はドンと壁際に押されたかと思ふと、グツと肩のあたりにはげしい痛みを感じた。庄太の右手には、キラリと光るものが振りあげられた！
「誰か來てつ！」
龍子は夢中て呼んだ。彼女の倒れた床に、血がダラ〳〵流れた。

「悪婆！　くたばれつ！」
庄太は、再び猛然と飛びかゝらうとした時、書生の岡本と、自動車の運轉手とが、一瞬をおかず、左右から彼の腕をさゝへた。

地に繋がれて

庄太が龍子に重傷を負はせた事件は、どんなにか靖也と良助とを驚かせたことだらう。どんなに工場の人々を興奮させたことだらう。
ほとんど人事不省に陷つた龍子は、すぐ病院にかつぎ込まれたのであつた。案外多量の出血のために、一時はどうかと危ぶまれたのであつたが、二三日の經過の後、醫師は彼女の生命に別狀はないといふことを宣言した。
庄太は、書生や運轉手や執事の周章狼狽するのを、冷やかに見やりながら、すぐその足で自首して出た。彼の態度は飽くまで潔よく、係り警部の取調べに對しても、なんの悪びれるところなく、ハキハキと答へるだけを答へた。――彼はたゞ、龍子が當然負ふべき罪と責とを、嘲笑と詭辯によつて逃れようとしたのに、悲憤したのであつた。彼は龍子に、世間に向つて己れを悔いて、その悪業を謝す

るといふ心持のなかつたことが、今でも遺憾であることを述べた。そして、それにしても、一時の憤怒に驅られて彼女を傷つけた自分の手段は、たしかに正法ではなかつた、常規を逸してゐた、この點ではどんな罰をも敢て受けねばならないと陳じたのであつた。

靖也はすぐ病院に龍子を見舞つた。――その時は、彼女は病床の上で、苦しい囈語のやうな呻きをあげてゐるのみであつた。彼はそこにゐる棟吉や菊江や、日比野博士夫妻に鄭重な挨拶をして歸つた。辭し去る時、棟吉だけは彼に對してかなり不快な非禮な眼を返したのであつたが、彼は決して意に介しなかつた。

彼はまた良助とともに、庄太にも會つた。

庄太は靜かに頭をさげて、なにごとも言はなかつた。たゞ、男らしく、受けなければならぬ罪は、立派に受けますから御安心ください、といふことだけいつた。そして、

「旦那！　どうか見事にお仕事を御完成ください。わたくしは、かうして旦那のお仕事をお手傳ひすることのできなくなつたのが殘念です。なんとも申譯がございません。しかし、暗い牢に入れられても、きつと旦那の船の進水式の來る日を、一日も早いやうにと祈りながら樂しんで待つてをります。」

と、淋しく笑つた。

良助は彼の言葉をよろこんだ。そして泣いた。

×　×　×

……思ひがけない事件から事件へ……靖也の身邊は多事であつた七月が過ぎた……

……八月が過ぎた……

……九月が過ぎた……

……十月が……十一月、十二月が……その年は暮れた。

第三船臺の人々は、いよ〳〵熱心に働き働いた。

ヤンショイサ
ヤサソラエー
雇ひは神樣
神樣ならば
親方神主ありがたや……

庄太の流行らしたあの鰊漁の唄は、絶え間なく人々の口から口に和せられた。

……そして遂に十箇月目、大空は紫の羅を垂れたやうに麗かに、陽光は金粉を撒きちらすやうにみなぎり、草も木も新らしい生命を綾に、色さまざまの花をつける三月の中旬、第二の雄康丸は完

成したのであつた。

船臺の人々の眼は燃え、唇は叫んだ。

「萬歳！」

「お目出度う！」

握手と握手、亂舞がそこに起つた。

靖也は船臺の下に、石像のやうに立つてゐた。彼の瞼は感謝の涙にぬれてゐた。

第二三八番船、第二雄康丸進水式期日は、來る三月二十七日をもつて擧行されることが、事務所の掲示板に大きくかゝげられた。

式の順序、作業、進水係の配置などが、謄寫版刷になつて、職工等の手に配られた。

進水主任は無論靖也であつた。それから、進水臺係、ドツクショアー係、キール盤木係、トリツガー係、パイプ係、押出水壓器係、獸脂係、ホース係、測定係、船内係、繫留係など——名譽ある係々の姓名が發表された。

みな意氣ごんで、晴れのその日の來のを待ちに待つた。

× × × ×

——その日は、ことに朗らかな天氣だつた。

第三船臺には、就業の警笛の鳴る前から、靖也以下の技師、職長、組長、伍長をはじめ、多くの平職工が、今日を晴れの進水式の準備にとりかゝつてゐた。

「お目出度う！」

「お目出度う！」

の聲が、ゆきあふ人々の口から發せられた。

午前十時に、當日の作業としてのトリツガア當見が行はれ、それから進水臺の矢締、スライド・スケール付力、サイド・ショアー、ボツトム・ショアー、ギルプロックの外し方が續いて行はれた。午後三時半、進水臺各部の檢査がはじまつた頃には、もう各方面の來賓や見物が、設けの式場へ續々と詰めかけてゐた。

靖也は始終緊張して、すべての指揮にかゝつてゐた。

「おう、君塚君、お目出度う！」

「君塚さん。おめでたう！」

——見れば、そこに、恩師の日比野博士と、アンナ夫人とが、禮服姿の榮藏に導かれて、莞爾として立つてゐるのであつた。

「おゝ、先生！」
「立派に出來たねえ。」
「有難うございます。」
靖也は博士と夫人とに、堅く堅く握手したのであつた。
「ほんたうに、よくおいでくださいました。難有うございます。」
彼はまた頭をさげた。
「今日の進水式には、わたしも家内も、來ずにはゐられないぢやないか。はゝゝゝ。」と、博士は滿足げに笑つて、「みんな、今日を待つてゐたのだ。君の阿母さんも、この室田さんも、わたし達二人も……おゝ、それから、朝倉子爵も見えてゐたよ。お孃さんと御一緒だつた。今にこゝへ來られるだらう。」
「え、朝倉子爵も……？」
靖也は不思議に顏の火照るのを覺えた。
——美知子さんも來てゐる！　この自分の晴れの日を祝すために來てくれてゐる！
靖也は、無論美知子が來てくれるとは考へてゐたのである。が、かうしてそのことを聞くと、今更やうに胸が高鳴るのであつた。

「君塚さん、もう四時に十分前です。電氣信號の檢査は終りましたが、これから舵のタムブラア外し方にかゝらねばなりません。」
と、伍長の田島が、いつもと違つて霜降りの新しい作業服をつけたまゝ、飛んで來た。
「さうか、すぐ行く。……それでは！」
靖也は博士と夫人に一禮した。
「あちらで拜見させて貰ひますよ。」
と、博士はいつた。
靖也は田島とともに船尾へ走り去つた。
——四時二十分、進水臺端深度測定が終ると、各係はそれ〴〵部署についた。
四時二十五分、船内係は乘船した。舷側の梯子は取りはづされた。
——突如、嘹喨たる奏樂が、臺下の音樂隊から起つた。
四時三十分！
モーニング服、シルクハツトの靖也の手は高く擧げられ、合圖の青色の電燈はパツと點ぜられた。當日第一の貴賓の手によつて、一段高い舞臺の上から船首にひかれたロープが、コチンと小さな斧で切斷された。五色のリボンで飾られた三鞭酒の罎がパツとあたつて船首に碎けた。

美しい大きな樂玉がサツと割れて、中から幾羽の白鳩が、翼を輕くはためかしながらヒラ〳〵と舞ひあがつた。

「萬歳！」

「萬歳！」

「萬歳！」

歡呼と喝采のなかを、一萬二千噸の新造船、第二雄康丸は、その巨大な體軀をしづ〳〵と動かしはじめた。

「萬歳！」

「萬歳！」

「萬歳！」

——祝賀の宴が開かれた。

社員も來賓も、一齊に雄康丸のために、そして君塚靖也のために乾杯した。

榮藏は肩身がひろかつた。彼は、この頃いよ〳〵肥つた、便々たる腹をつき出しながら、愉快げに

來賓の斡旋につとめてゐた。

靖也は四方から握手攻めに會つた。

伍長の田島がやつて來た。

「萬事滯りなく濟んで、ホツとしました。いや、お目出度うございます。」

「みんなの力だ。感謝します。實にみんなよく働いてくれた。」

靖也は感慨深くいつた。

「お目出度うございます！」

田島は繰りかへした。

その調子と姿勢とが殊更に改まつてゐたので、靖也は、ふと顏をあげた。

「君塚さん。わたしはこのお祝ひの言葉を、矢島庄太として申しあげます。」

「えつ……？」

「君塚さん。これを御覽ください。」

田島は、自分の着てゐる新らしい作業服の、上着の釦をはづして、ちよつと裏をひるがへして見せた。——そこに、「矢島庄太」と書いた、白い布片が縫ひつけられてゐた。

「おゝ……」

「君塚さん。この服は矢島君のものです。わたしは昨夜、矢島君の家へ行つて、これを借て來たのです。この服を着て、今日、名譽ある船内係の役目を果しました。田島清太郎でなくて、矢島庄太としてわたしは今日の役目を果したのです。こんなに嬉しいことはありません。それで、矢島庄太として今、改めてお祝ひを申しあげたのです。」

「おゝ、君！　よく……よくやつてくれた。よく氣がついてくれた。難有う！　難有う！」

靖也は強い感激に撃たれて、聲も震へるのであつた。

朝倉子爵の姿が見えた。

「君塚さん。立派な船ですなう。大成功です。お祝辭を申しあげる。」

ハツと靖也は頭をさげた。そして顏をあげた時、そこに、つゝましく笑み迎へた、美しい黑い瞳があつた。

「お目出度うございます。」

「おゝ、美知子さん。よくおいでくださいました。」

靖也はよろこびに滿ちて、眉も晴れやかに、彼女のはうへ一歩進んだ。

田島は去つた。

「ほんたうに、御立派といつていゝか、お勇ましいといつていゝか、わたくし、進水式といふものを

今日はじめて拜見したのでございますが、あの臺の上から大きな船が搖ぎ出した時は、胸がワク〳〵いたしました。」

「こんな感激は、男でなくちやわからない。」

子爵は葉卷をくはへながらいつた。

「ほんたうに、今日といふ今日は、女に生れたことが、どんなに口惜しい氣がしたことでございませう？」

「女は駄目さ。はゝゝゝ。」

「ほんたうに駄目でございますわねえ。」

「はゝゝゝ。いや、美知子さん。決してさうではありません。」と、靖也も笑つて、「女には、また女としての、男には味はうことのできない境地の感激があるものなんです。」

「しかし、女の感激などゝ申しますものは、それは淺薄な、薄つぺらなものでございます。このやうな大きな、このやうな深い感激の日の來ることは、一生に一度だつてないことゝ存じます。それを思ふと詰らないのは女で……」

「はゝゝゝ、美知子、わしが駄目だといつたからつて、そんなに悲觀するものでもない。いまに、お前には、大きな深い感激の來る日があるのだよ。……なあ、君塚さん。さうぢやないか？　はゝ、は

ゝゝゝゝゝ！」

子爵は高く笑つた。或る意味をもつた眼で、靖也と美知子とを、等分に見やりながら、快げに笑つた。

靖也と美知子は思はず顔を見あはせた。——眩しい眼と眼が微笑した。

——一箇月の後、靖也と美知子との結婚式が、質素に簡單に、しかし、嚴肅に行はれた。媒酌は日比野博士夫妻で、叔父の榮藏が、靖也の親代りの位置であつた。

披露式は上野精養軒で行はれたのであつたが、これも靖也と朝倉子爵の希望によつて、ほんの重立つた姻戚知己を招いたばかり、極つゝましやかな祝辭と會食に終つたのであつた。

靖也は、造船所の書齋を、西片町の自宅に移し、美知子とともに新しい生活に入つたのであるが、披露式の翌日から、すぐ工場へ出勤した。親友の高柴から、せめて二三日の新婚旅行をと勸められたのであつたが、それはこの夏十日ばかり休暇がとれるから、その時の樂しみに殘して置かうと笑つただけであつた。

母の康子の喜びと滿足、美知子の貞淑な質實な內助のことなど、今更こゝに言ふまでもあるまい。

良助は、忌日命日にお加代の墓參を怠らなかつた。そして待ちに待つた——庄太の刑期の滿ちて無事に出獄する日を。

庄太の刑期は一年半であつた。この十月中旬頃には再び世に出られるわけである。勿論、出獄後はたとひ刑餘人であつても、彼の人物は誰からも敬意をもつて見られてゐるのではあるし、靖也や田島の口添へや、職工達の希望もあるから、直ちに造船所へ勤務することは許される筈になつてゐる。しかも、伍長として迎へられるとの噂も確實である。彼の妻のお兼は一時女中代りに靖也の家に引き取られ、娘おみきは本郷の某小學校に通へることになつたので、「嬉しいなあ〳〵！」を連呼しながら、靖也に買つて貰つた學校用品や袴や靴を撫でてゐた。賢い子だから、きつと成績もいゝにちがひないと、美知子はお復書の役を自ら引き受けた。

工場では、いつか田島の願望した、職工達のための英語の夜學會が毎週四度開かれ、靖也の熱心な教授で、もう讀本の卷の二まで進んでゐる。

榮藏は、この第二の雄康丸の成功によつて、靖也にしばらくの休養を與へた後、次の、大きな仕事を遂げさせようと考へてゐる。

——すべては終つたのだ。が、要するに一段落なのである。靖也の座右銘としてゐる「一つの道」は、まだ眞直に果なく彼の足もとに續いてゐるのである。彼はどこまでも、たゆまず屈せず勇ましく

一歩々々をしつかり踏みしめて進むことであらう。たゞ、以前とちがつたことは、彼がその道に、或はやゝ疲れ或は輕く躓かうとする時、彼の傍にあつて、更に彼をいたはり彼を勵ます、美知子といふ忠告者を得たことなのである。

菊江は小宮の慘死を聞いて、一時はひどく悄氣かへつてゐたが、一箇月も經つた今はもうケロリとした顏で、ピアノをボン〳〵鳴らし出した。——どうやら、彼女には新規蒔きなほしの戀がはじまつたといふ噂もある。

そして龍子は……

彼女は傷が癒えて退院すると、轉地療養に出かけたが、隈部の立派な別莊が逗子にあるにもかゝはらず、信州沓掛にある、父日比野博士の小さな別莊——といふよりは博士の夏の書齋——に行つてしまつた。

そこで去年の秋から彼女の讀書生活がはじめられたのであつたが、この間に、棟吉との離婚の話が再燃して、遂に隈部家を去ることになつた。それについては、日比野博士も、今度は反對しなかつたといふ。——博士は、隈部鐵工所の或る惡手段やら、綱紀の紊亂やら、棟吉その人の品格やらに、苦〻しい眉をひそめてゐたのだといふ。

かうして一人の女性に立ちかへつた龍子はたゞ靜かに淋しく讀書の日を送つてゐたが、遂に彼女は

この五月のはじめ、父博士に希望して、再び英國へ留學を許されることになつた。——四年前、父と靖也とともに行つた、思ひ出深い英國へ——

なんでも、彼女は社會學を研究するのだといふ——

君塚靖也様——

すべてを——すべてを懺悔いたします。

わたくしは、今、あなたに對して、あなたがいつかわたくしを罵られた、「恥よ、悔いよ」のお言葉の、その恥とその悔とに滿ちてをります。

あなたに對するこれまでのわたくしの心持と態度とをふりかへつてみる時、わたくしは自分の姿の醜さを、自分でも唾してやりたいほど強く感じるのでございます。おゆるしぐださい。どうかおゆるしください。わたくしはこゝで、あなたの足もとにひれ伏して、わたくしのこれまでの罪と責とをおわびいたします。

わがまゝで放縱で驕慢だつたわたくしの性格——これがあなたを苦しめ、あなたを陷れようとしたのです。まつたく、わたくしはあなたから罵られたとほりの「汚女」なのでした。そしてこ

のわがまゝ、放縱、驕慢は、あなたを苦しめ陷れようとしたばかりではなく、それは實は、わたくし自身を苦しめ陷れたものであることを、今ハツキリ知ることができました。恐しいふしだらな惡夢から、はじめて眼がさめたのでした。

わたくしは自分の犯した罪業に對して、これからの半生を、その償ひに暮したいと思つてをります。せめて自分を眞人間に仕立てなほして、自分の力のあるだけを、及ばずながらも、人の世のためになるやう働きたい。それがあなたに對する——そして父や母や、わたくしのために煩はされたすべての人々に對するゝおわびにはならぬながらの、おわびになるだらうと存じます。

わたくしのために、今まで獄中にゐられる矢島庄太さんにも、實にすまない氣がしてなりません。わたくしは過日、或る辯護士に相談して、一日も早く矢島さんの身が自由になるやうにと、できるだけ手續きをとつて貰ふことにいたしました。

あなたのお仕事が立派に完成して、めでたく進水式の行はれたことは、新聞で讀み、また父からも話を聞きました。ほんたうに嬉しいことです。たゞ、かうして、あなたに、晴れておよろこびの言葉を申しあげにゆけないわたくしの身を悔むばかりでございます。

美知子樣と御結婚のことも承はりました。あの方の正しく清くおだやかなお心は、きつとあなたの御一生を幸福にし輝かしいものになさると信じてをります。——このおよろこびにさへあが

れぬわたくしの罪の深い厭はしい姿は！　と、今さら悔いても悔いても及びません。

わたくしは今日の汽船で、英國へ旅立ちます。三四年しつかり勉強してまゐります。自分といふものを、すつかり鑄なほしてまゐります。そしてあなたと美知子さんの前に、顏もそむけられないで立てるやうな、眞實の女となつて歸つて來る積りでございます。その時こそ、あなたもきつとよろこんで、わたくしにお會ひくださることと存じます。

——人間は、相寄り、相反き、今日は携へ明日は離れゆくものです。しかし、畢竟は地に繫がれて、生きなければなりません。わたくしの樣な邪惡な女でも、かうしてながらへてまゐります以上は、いつかはあなたの前に、一切を恥ぢ、一切を悔いた女として、晴れやかに立ち得る日が來ると思つてをります。それを樂しみにして一生懸命に勉强してまゐります。

この手紙は、汽船の出る間、急いで或る休憩室の隅でしたゝめました。讀みかへす暇もございません。亂筆のまゝ投函いたします。おゆるしください。

どうかおからだをお大事に——そして美知子樣との、御多幸な御生活を、心からお祈りいたします。

五月十日

龍子

×

×

×

——人は生きる。

彼のたゞ「一つの道に」生きる！

驕樂の鏡に誇り輝く者、正義の大地に嚴かに立つ者、死の墓に安らかに眠れる者——すべては神の榮光と裁斷とによつて、その生くべきまでを生きる！

呪ひと恥と悔いと——人をそしり、また自を嘲つた、血をすゝつたやうな「毒唇」は、いま靜かに閉ぢる……。

「毒唇」終り

昭和六年九月十五日印刷
昭和六年九月十八日發行

〔毒唇〕定價二圓

著者　畑耕一

東京市本郷區駒込上富士前町百九番地

發行者　上村勝彌

東京市神田區三崎町三丁目七一

印刷者　株式會社共榮舍

東京市本郷區駒込上富士前町一〇九番地

發行所　合資會社先進社

電小石川一二〇四四番
振替東京六五二三八番

納本

不許複製

先進社大衆文庫

大佛次郎著	かげろふ嘶	定價七十錢 送料八錢
吉川英治著	女來也	定價七十錢 送料八錢
三上於菟吉著	清川八郎	定價七十錢 送料八錢
佐々木味津三著	双影走馬燈	定價八十錢 送料十錢
江戸川亂歩著	明智小五郎	定價七十錢 送料八錢
甲賀三郎著	神木の空洞	定價七十錢 送料八錢
行友李風著	獄門首土藏	定價七十錢 送料八錢
國枝史郎著	生死卐巴	定價七十錢 送料八錢
林和著	遊俠男一代	定價七十錢 送料八錢
直木三十五著	荒木又右衞門	定價七十錢 送料八錢
土師清二著	旅烏國定忠次	定價七十錢 送料八錢

607
353

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black